魔道士と整理係

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔道士と整理係

【Ｎコード】
Ｎ１０４３ＢＡ

【作者名】
豆吉

【あらすじ】
上司からのセクハラに嫌気がさして勤めていた会社を辞めた桜木七生（３１歳）。
ハローワークの前でアレン・クロスビーさんという外国人男性に声をかけられ、彼のアシスタントとして働くことに。その１年後、アレンさんから給料３割増で、彼の甥・デルレイの家の書庫＆倉庫の整理係として働いてほしいと頼まれる。びっくりなのは、アレンさんとデルレイは実は異世界の人間で、デルレイの家は異世界のブレドン王国にあるってこと！

「この年齢でファンタジー経験をするなんて。人生って驚きの連続だよ。」と言う彼女の異世界での日常と恋愛話。

プロローグ：それは1年前でした

私は桜木（さくらぎ）　七生（ななお）。３１歳で独身、一人暮らし。恋愛は何度かしたけど今は彼氏なし。・・・・結婚も予定なし。製薬会社で管理部門の事務職として早１１年。給料も待遇も悪くない。人間関係も円滑・・・・だったんだけど。上司の度重なるセクハラおよびセクハラ発言に嫌気がさして会社を辞めました。

ま、辞めるときに上司のセクハラの証拠をばっちり労働局と人事につきつけて上司が免職処分を受けたと同期から聞いてすっきりできたからいいけどさ。

仕事を辞めたので、実家に帰るというのも、一瞬考えたけど・・・よくよく考えたら今うちの実家は同居している弟夫婦に子供が生まれて孫フィーバー真っ最中。おかげで母親の「まだ結婚しないの」攻撃をまぬがれているというのに無職になった姉が転がり込むのって非常によろしくない。

私は実家に帰るという考えを捨てて、ハローワークに向かうことにした。派遣会社に登録しておくのもいいかもしれない。ネットの求人サイトにも登録だな。

ハローワークの中に入ろうとしたところ「ちょっと、すみません」と後ろから声をかけられた。振り向くと、シルバーグレイの髪の毛に緑色の瞳で彫りが深くどうみても外国人の男性だった。

周りをきょろきょろしてみるけど、私以外に人がいない。私は自分を指差して「私？」と示すと、その男性は何度もうなずいていた。

「あなた、職を探していますね？」男の人はいきなりなめらかな日本語で私に言った。

「はあ・・・まあ、探してますけど」なんじゃ、この外人は。

「じゃあ、私のアシスタントとして働いてみませんか？」

「はあ？」

「失礼しました。私、アレン・クロスビーと言って、職業は・・・まあ、貿易業です。『クロスビー商会』という会社を経営してます。」
「はあ。」どうして、貿易業というまえに一瞬考えたんだろう。
「あなたのお名前を教えていただけますか？」
「あ、失礼しました。私は桜木七生です。」思わず正直に名乗ってしまった。
「サクラギさん。ここで立ち話もなんですから、もし時間があったら私のオフィスで話の続きをしませんか？待遇なども、詳しく話せます。この近くですから。」

“クロスビー商会”のオフィスというのは、クロスビーさんの住宅だった。たくさんの樹木が生い茂る大きな洋館で、クロスビーの表札のしたにクロスビー商会という表札もついている。
「奥さんを亡くしまして、家政婦さんを頼んでいますが、乱雑ですみません」と言うが、とても整然としている。
クロスビーさんが入れてくれた紅茶を飲みながら（これがまた美味しい）、私はクロスビーさんの話を聞いた。
「仕事内容というのは、私の仕事のアシスタントです。メールや電話のやりとりと、品物の管理です。それから、ちょっと言語を覚えてもらいます。ＯＫ？」
「言語、ですか？」
「はい。ブリードン語と言って、うちの貿易に必要な言語です。他では役にたちませんが、私の仕事には大変役立ちます。待遇なのですが、会社で各種保険と年金には加入します。勤務時間は朝９時からと決まっていますが、仕事によって終わる時間はまちまちです。お休みは週休２日ですが、事前に言っていただければ何曜日に休んでいただいてもいいです。病気とかの場合は私に電話してくれればいいです。」
言語を覚えなくちゃいけないのは大変だし、勤務時間が不定期だ

けど待遇は悪くない。
「あと・・・言語を覚えた後、ちょっとした出張に行ってもらうかもしれないです。大丈夫ですか？」
「どこにですか？」
「えーっと、カイガイ？ですね」
おお、海外出張か。事務職の頃には縁がなかった。なんか楽しそう。
「あ。そうそう給料なんですが各種手当てを差し引いて・・・・こんな感じです」と言ってクロスビーさんが提示した金額は、なんと前の会社の給料より2割増し！！私は思わず目を見張った。
「給料は“クロスビー商会”名義で振込みになります。なにか質問はありますか？」
「他の社員の方というのはいらっしゃいますか？」
「いいえ。私一人ですね。お金関係は全部お願いしてますから。書類を提出するだけなので楽です。」クロスビーさんは、その人のことを全面的に信頼してるらしい。
　クロスビーさん本人も最初は胡散臭かったけど、話を聞いてるとマトモな人そうだし、何より新しい言語を覚えられたり（他では使えないらしいけど）、海外出張があるかもっていうのもいい・・・そして何より、あの手取りの金額。判で押したような前の仕事内容とは違いなんだか楽しそうだ。
　私は、クロスビーさんの申し出を受けることにした。
　クロスビーさんはうれしそうに「ありがとうありがとう」と何度もお礼を私に言った。
　そんな、お礼を言われるようなこと、私しただろうか？
　とりあえず、あっさり次の就職先が見つかったのはよかったかもしれない。

プロローグ：それは1年前でした（後書き）

読了ありがとうございました。
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。
ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

新作をＵＰしました。
現代物はお休みして、ファンタジー（と言えるのか）を書くことにしました。
アラサー七生の異世界生活を楽しんでいただけると幸いです。

1．失礼なオトコ（前書き）

プロローグから1年後になります。
『』内の会話はブリードン語
「」内の会話は日本語です。

1．失礼なオトコ

クロスビー商会に入社して、1年が過ぎた。クロスビーさんと仕事をするのは、とても楽しい。

電話やメールは時々しか来ないのでそっちの仕事はあんまりなくて、メインはクロスビーさんの家にある珍しい品物の管理だ。ブリードン語も、クロスビーさんから抜き打ちテストをされたりして日常会話と読み書きに困らなくなった。

仕事が特にないときもあって、そういうときはクロスビーさんが庭にテーブルを出してお茶をするので、ご相伴に預かる。クロスビーさんの庭は亡き奥様が丹精こめて手入れをしていたらしいけど最近は忙しくて手入れができないらしい。

私も暇なときには草むしりをしたり手入れをすることにしてるけど、この庭がよみがえったら、さぞかしきれいだろうな。

「桜木さん、私のことはアレンと呼んでくださいね。私もナナオと呼びますから」

「上司を名前で呼ぶんですか？できませんよ。」

「貿易相手にクロスビーという名字が多いんですよ。区別できないでしょう？」

「なるほど。わかりました。」

そういう理由があるなら、と私はクロスビーさんをアレンさんと呼ぶことにした。

それから数日後、私はいつもの時間にクロスビー商会用に使っている部屋のドアを開けた。

「おはようございます。アレンさん。」と言ってドアを開けたところ、アレンさんの他に若い男性が立っている。

アレンさんの20年前ってこうだったんだろうな・・・息子か？髪の毛の色は同じだけど、瞳の色はコバルトブルー。

私がその人をじっと見ているように、その人も私をじっと見ている。
「アレンさん、・・・こちらは、どなたですか？」
「おはよう、ナナオ。これは私の甥で、デルレイ・クロスビーといいます。」
『叔父上、俺にも分かる言葉で話してもらえないだろうか・・・美人だって言うから期待してたのに』
『デルレイ、お前失礼だぞ。ナナオは仕事もできるし美人だ。』
『そうですか？仕事はできるかも知れませんが、叔父上と私とでは美意識が違うようだ』
デルレイさんは私が分からないと思ってしゃべっているようだけど、こっちはばっちり分かるんだ。悪かったな、美人じゃなくて。アレンさん、こんな普通の顔を美人と言ってくれてありがとう。

『すみませんね。美人じゃなくて。アレンさんがフォローしてくれてなかったら、あなたのすねには今頃、私の5センチヒールキックが炸裂しているところですわよ』
私がにっこり笑って二人の会話に割り込むと、デルレイさんは『な？？おまえ、言葉が分かるのか？？』と驚いた。
『オマエじゃなくて、ナナオ・サクラギという名前がありますの。言葉はアレンさんに教わりましたから日常会話に不自由しない程度にしゃべれるようになりましたし、読み書きもできます。わからない言葉でしゃべられるのがイヤなら、あなたもこちらの言葉を覚えたらいいわ』
『う・・・・生意気なやつ。どうみても俺より年下のくせに』
『あなた、年齢はいくつですか』
『32だ』
『あら、同じ年齢ですわね。』とニッコリ笑うと、失礼なオトコ・デルレイは『げ』と言ったきり絶句してしまった。
その頃、私たちの会話を聞いていたアレンさんが、とんでもない

ことを考えていたなんて、そのときは全然気がついていなかった。

1．失礼なオトコ（後書き）

読了ありがとうございました。
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。
ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！
いきなり失礼なオトコですが・・・これがヒーローなんです。

2．上司からの引越し命令（前書き）

七生、洋館ライフにぐらつく。の巻

2．上司からの引越し命令

今日は特に急ぎの仕事がないらしく、アレンさんが紅茶を入れてくれてお茶の時間になった。
「ナナオ、デルレイが失礼なヤツですみませんね」
「いいえ～。アレンさんの身内じゃなかったら今頃ヒールで蹴っ飛ばしてますけど、我慢します。」
「なんなら蹴っ飛ばしてもＯＫですよ」
「あら。いいんですか？」私は、デルレイを見てニヤリとした。
デルレイは言葉が分からなくても何かを察知したらしく『おい、ナナオ。やめろよ』と若干身構えている。
『ナナオって気安く呼ばないでよ。クロスビー』
『叔父上には名前で呼ばせてるじゃないか。俺にも呼ばせろ』
『いやよ。なんで人のことをけなす人間に名前よばれなきゃならないのよ。私のことはサクラギと呼んでよね』
それにしても、コイツの性格・・・。アレンさんの甥でしかもハンサムな顔してるのに残念なオトコだな。
デルレイは、私の思考を読んだらしく『俺に対して、かなり失礼なこと思ってるだろ？』と私をにらみつける。
ぎく。私は『そんなこと、思っていません』とごまかしたけど、なぜわかったんだろう。

「ナナオ。今日はあなたにお願いがあるのです」
今まで私たちのやりとりを黙って聞いていたアレンさんが口を開いた。
「あなたに出張に行ってもらいたいところがあるのですが・・・・かなり長期になりそうなのです」
「え？どれくらいですか？」
「それが・・・・仕事が終わる明確な時期が把握できないのです」

「え。じゃあ1年かかるなんてこともあるんでしょうか」
「ええ・・・そこで提案があるのです」
「はい。」
「あなた、私の自宅に引っ越してきませんか？部屋は余っていますし個々の部屋バス・トイレがついてますから寮みたいな感覚でいてくれれば」
「へ？？」アレンさんの申し出に私は驚きのあまり声もでない。
「家賃はいりませんよ。こちらの都合であなたに出張をお願いするのですから」
　家賃がタダで、この洋館に住めるのか・・・・うーん。心惹かれてしまう。でも近所のうわさとかにならないんだろうか。家政婦さんだって「あら。まあ」とか言っちゃって、まさに「家〇婦は見た」状態になったりして。
「ご近所のうわさになったりしたら、困りませんか？私は別に実家も遠いし差し障りありませんけど」
　アレンさんは笑って、「大丈夫ですよ。家政婦さんは私の事情を知ってる方ですからね。どうでしょう？申し出を受けてもらえないでしょうか。」
　1年以上も家を空ける可能性があるってことは、防犯上も心配だし・・・よし。ここは思い切って憧れの洋館ライフを満喫しよう。私の愛読書のひとつは「赤毛のアン」シリーズだ。

「・・・わかりました。アレンさん。ただ、今の部屋に置いてある家具や家電は持ってきてもいいですか？」
「家具は備え付けてありますから、そちらを使っていただいてかまいませんよ。納戸から好きな家具を出してきてもいいですし。」
　なんですと。あのアンティークな家具を使っていいとな？？すごーい。
「わかりました。じゃあ、家具は処分して家電だけ持ち込みます」
「じゃあ、配線などを手配しておきましょう」

「お気遣いありがとうございます」
アレンさんの提案で、憧れの洋館ライフを送ることになってしまった。
「それで、出張というのは・・・」私は仕事内容を聞くことにした。
「ああ。それはですね・・・」とアレンさんが言いかけたところ、
『俺のアシスタントだ。ナナオ』と、自分に分からない言葉で会話をされて不満たらたらのデルレイが会話に割り込んできた。

2．上司からの引越し命令（後書き）

読了ありがとうございました。
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。
ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

アレンさんの家は、一応「グリーン・ゲイブルズ」がかなり広くなった感じです。
描写の欠片もないのは、ひとえに作者に描写力がないからです・・・

3．カイガイ違い（前書き）

行き先判明。の巻

3．カイガイ違い

『俺のアシスタントだ。ナナオ』デルレイの言葉に私は耳を疑った。
思わずアレンさんを見ると苦笑してうなずいている。
「えー、こんな失礼なヤツのアシスタントなんて出来ませんよう！！他に誰かいないんですか？」
思わずアレンさんに言うと、アレンさんも「すみません、ナナオ。あなたが一番の適任者なんですよ・・・」と電卓を取り出しなにやら数字を打った。
「あれの迷惑料も込みで、今後の給料はこれくらいにしますから・・・どうですか？」
と見せてきた数字は、今の給料の3割増し！！つまり、以前の給料の5割増し。おまけに家賃もタダだし・・・・ううう。増えていく預金残高には勝てない。将来を考えたら、こういうヤツのアシスタントをして何かを得るってこともある。
アレンさんのところで働いた当初、本当に2割増しの給料なのかと、実は疑っていて給料日になったらまっさきに通帳を確認した。すると、言ったとおり2割増の給料が振込まれており、現在も金額に変わりはない。
「わかりました・・・アレンさんを信用して、デルレイのアシスタントを引き受けます」
「ありがとう、ナナオ。甥は扱いづらい性格ですが、悪いヤツではありませんので、ナナオならきっとこの仕事で何かを得ることができますよ」
「はい」
『叔父上、話は終わったんでしょうか？』といらいらした様子でデルレイがアレンさんに聞いてきた。
『終わったよ。ナナオは引き受けてくれるそうだ。デルレイ、よかったな』

『アレンさん、それで私、パスポートを更新しないといけないんですけど』
『パスポート？』
『はい。海外に行くならパスポートが必要ですから』
このとき、アレンさんとデルレイが顔を見合わせて黙ってしまった。

『叔父上・・・ナナオに出張場所を説明していないんですか？』
『しまった。日本でカイガイといえば海の外。違う国のことだった・・・・ナナオ』
私は二人の会話から、ちょっと嫌な予感を覚えた・・・・・ましゃか、そんなことがあるんだろうか。ファンタジー小説じゃあるまいし。
『ナナオ・・・出張場所と言うのは、海外ではなく、違う世界。異世界にあるブレドン王国なんです』
『はあ？？』
『実は、クロスビー商会の仕事は貿易の他にクロスビー家が所有している、こちらとあちらをつなぐ“扉”の管理とクロスビー家がこちらで持っている財産管理があるのです。』
『はあ・・・』
『こちらの財産管理は、ナナオが書庫と倉庫でしっかりやってくれたので何の心配もなくなりました。ですが、王国のほうの書庫と倉庫の管理が・・・・デルレイ始め歴代の当主がさぼったせいでえらいことになっていまして。そちらをナナオに整理してきてほしいのです。やはり、異世界というのは、ダメでしょうか？でしたら、こちらの管理を引き続きやっていただいてもかまいませんよ？』
『断っても、クビにはならないってことですか』
『有能なナナオをクビになんてしません。ナナオを王国に持っていかれるのも本当はイヤなんですよ』

異世界かあ・・・32年生きてきてこんなことに遭遇するなんて思いもよらなかったよ。さっき、3割増しの給料で了承しちゃったしなあ・・・後だし情報が強烈だけども。
それに、異世界を見に行くチャンスなんてそうそうないし。実は、結構わくわくする。
『アレンさん。分かりました。私、王国に行きます・・・ただし、条件があります』
『なんでしょう？』
『私の携帯電話をアレンさんと常時つなげておいてほしいこと、私が頼んだものを届けて欲しいこと、勤務待遇を今と同じにしてもらうこと・・・それから、私が戻りたいと思ったときにはすぐ“扉”を開けてほしいのです』
『条件が多いな、ナナオ』デルレイが口を挟む。
『そちらの都合で異世界に行くんだから、これくらいは当然よ。』
アレンさんは、しばらく考えた後『わかりました。メールは無理ですが、通話はなんとかなるでしょう。充電の心配もいらないように設定もします。
こちらに戻りたいときは、ナナオ。私に電話をくれればいつでも扉を開けますよ。勤務待遇を同じにするのは当然ですね。その代わり、ナナオは1日1回、私に電話で業務報告をしてくださいね。』
『わかりました。出発はいつですか？それまでにこちらに引っ越してきます』
『1週間後に迎えに来る』デルレイが口を挟んだ。
『わかりました。アレンさん、今日の仕事が終わったら引越し準備に入ります。』
この年齢でファンタジー経験をするなんて。人生って驚きの連続だよ。

3．カイガイ違い（後書き）

読了ありがとうございました。
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。
ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

主人公は給料3割増し（デルレイの迷惑料込み）で異世界に行くことを自分で決断してます。
ちょっとトリップとは違うような気がして、タグに「トリップ」を入れておりません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1043ba/

魔道士と整理係

2012年1月6日10時49分発行